

④額田の鈴木市十郎と寺門治平

那珂市歴史民俗資料館

鈴木市十郎は額田南郷の庄屋を務め、関西方面との綿糸卸を営んで大きな富を得ていた。徳川光圀は、江戸上野の寺院前に棄てられていた女子を拾って養女とし、万姫と名付けて育てた。額田の鈴木家の繁昌を耳にし、将来の生活を思って市十郎に嫁がせた。常陸太田の西山荘に隠居した光圀は、城下の往復の際はもちろん、近くを訪ねた折りにはしばしば立ち寄って市十郎に感謝し、万姫を励ました(万姫の墓所は額田の阿弥陀寺内墓所)。鈴木家では貞享4年(1687)、別に八畳二間の書院を建てて光圀を迎えた。その後の歴代藩主も水戸家の墓所瑞龍山や光圀の隠居所西山荘を訪れた折りには必ず立ち寄っている。この書院は現在でも茅葺きのまま保存され、茨城県指定文化財となっている(写真上)。室内の笈欄間や流水に浮かぶ花をあしらった板欄間は注目される装飾です。天保4年(1833)3月10日訪問した9代藩主斉昭は「此の里の栄えしられていもの子もあまたに出て見ゆる楽しさ」とその繁栄振りをたたえている。



鈴木家7代の世美(号は櫟堂・梅岡)は、記録まめな著述家で「鈴木家記録」には万姫関係や烈公の訪問関係の記録もある。また人物、花鳥を好んだ画人でもあり、数多くの作品を残している(写真右：『那珂町史 中世・近世編』)

一方、かつて庄屋役を務めた額田村の寺門治平。明治26年(1893)2月7日、徳川慶喜は母登美宮(貞芳院)を瑞龍へ埋葬しての帰途、治平宅へ宿泊となった。夕方、座敷へ通された慶喜は一向に姿勢を崩さず緊張した面持ちであった。主人の治平は何故かと不思議に思い、不安にもなった。もしやと思い床の間の掛軸を掛け替えたところ、慶喜は安堵したようにやっと安座となった。掛軸は、寺門家に伝えられた慶喜の父斉昭の書であった。「父を背にしては寛ぐことは出来ない」と慶喜の孝行心を示す逸話である(『徳川慶喜公伝』)。寺門家には、慶喜公が宿泊された際に用いられた枕屏風が、今でも大切に保存されている。(写真左)